

## 三〇年代におけるアメリカ知識人の動向

——ラップの解散とジョン・リード・クラブの解散——

樋口秀雄

はじめに

三〇年代におけるアメリカ知識人の動向（樋口）

ダニエル・アローンは『左翼の作家達』の結論において、従来の文学史家の一九三〇年代に対する扱い方に強い不満を表明し、知識人をあれ程ひきつけた左翼文学運動の意味を再認識すべきであると強調して、凡そ次の様に述べている。三〇年代、特にその中期迄の共産主義運動とアメリカ文学の關係は今迄ほとんど無視されて来た。然し、共産党の主催する作家活動、あるいは共産党の情宣活動によって、「歴史を発見」した新しい作家達が、たとえ価値がない（これは事実反するが）としても、彼らの左翼文学運動はその反対の立場にある者をも巻き込んだ影響の大きなものであって、この時代の知識人でこの運動と無關係で通し得た者が少ないと言わなければならぬ。たとえばこの運動と正反対の極にあるノーマン・フォスターを中心とするヒューマニズム運動も対極的な運動としての係り合いが強いし、ましてや一時的にしるこの左翼文学運動に積極的に参加していった多くの作家の残した足跡——従来無視されて来たアメリカの社会的側面に眼を向け、アメリカの当面する問題への直視を妨げていた障害物を除去し、これらの問題点の積極的討論の場を提供したこと——は、いくら強調して

もし過ぎることにはならない。<sup>(1)</sup> 七〇年代に生活するわれわれの立場から、彼等の行動を独善的、ローマン主義的、更には自己欺瞞的といった修飾語で冷笑することは出来ても、世界「革命」を達成しようとした彼らの真しな態度を一笑に付すことはあまりにも単純な思考と言わなければならない。マルカム・カウリーの様にプロレタリア文学運動に積極的であった作家が、「当時共産党に所属していた者には大きな威信がみられた。彼らの語ることとは全て神からの直接のお告げと考えられる程であった」<sup>(2)</sup>、と回顧するのはいささか誇張が感じられるとしても、「人間の悲惨な状況が蔓延し、避け難いものとなって来た為、現存の社会体制を運命として受け入れることが出来る人がいたとすれば、それは馬鹿か冷血な人間だけであった」<sup>(3)</sup>とするルイス・マンフォードの手紙は、ウイリアム・フィリップが自伝を書きたくない理由としてあげている誇張と自己正当化の無意味さを考慮に入れたとしても、尚且つ三〇年代における知識人一般の精神の風土を伝えていると言えるだろう。従って、「私が学んだものは無意味だとは考えられない。三〇年代における共産主義の歴史は、アメリカ知識人の歴史と切っても切れない関係にある」<sup>(3)</sup>、というグランヴィル・ヒックスの回想も決して誇張されたものとは思えない。五〇年代からの回顧には明瞭に挫折感がみられるのに対して六〇年代後半からの回顧には三〇年代の左翼文学運動になんらかの教訓を見出そうとする強い傾向がみられる様に、その回顧する主体の現在の置かれている社会状況とその思想によってその視点の異なるのは非常に興味深いことである。然し、この小論が意図としていることは、アメリカの三〇年代における知識人の左翼文学運動への傾斜の動機と、その運動からの離脱の過程を論ずることではなくて、既にこの運動の渦中に飛び込んで、アメリカにおける左翼文学運動の中心的役割を演ずるジョン・リード・クラブ及びこの運動の機関誌とでも言うべき『ニュー・マッセズ』の活動から、このクラブの解散及び全

米作家会議の開催迄を、ソヴィエトの文学運動との関係において出来るだけ事実に即して論述することである。

一 ジョン・リード・クラブと『ニュー・マッセズ』

一九三二年四月二十三日、ソヴィエト共産党中央委員会は、文学及び芸術の分野における現存の全ての組織を解体し、単一組織としての全ソ作家連盟を結成すると発表した。社会主義建設を目的とした情宣機関としてのプロレタリア文学運動組織ラップ（RAPP）は、社会主義建設が成功を収めつつある現在無用のものであるばかりか、最早やセクト的傾向すら持ち始め、当初この運動に共感を寄せていた同伴者作家を疎外し、これから孤立する危険が生じた為である、<sup>①</sup>というのがその理由であった。直ちに組織委員会が発足し、委員長にグロンスキー、書記にはキルボチンがそれぞれ任命され、ゴリキーは名誉委員に推された。この委員会は共産党の統制下に置かれ、ソヴィエト文学を単一組織に結集させることによってこの運動のセクト主義的傾向を是正し、党との合理的な連係の回復を意図した。

もつとも、このセクト主義的傾向は、党の決定を忠実に実行した結果であって、ラップの独善的な方針ではなかったのであるから、ラップの同伴者に対する敵しい姿勢は誤りであるとする党中央委員会の批判は、党自体の政策上の失敗をラップに転化することによる自己正当化のための口実であると言えよう。

一九二六年から一九三二年に至る「プロレタリア文学理論」が、党の方針として存在する時に、どうして同伴者作家に対する積極的寛容の姿勢が可能であろうか。党の道具として、文学の反主流的イデオロギーと徹底的に闘った結果がラップの排他性を生み、それによって見るべき業績があがらなかったとしても、「ラップの創作綱領

の固くした態度と、その一連のスローガンにみられる誤った姿勢が、否定的な形でプロレタリア作家の作品に影響を及ぼした」というゴリキの批判は、ラップそのものよりも党に向けた批判として解釈すべきであろう。

然し、プロレタリア文学理論における単純な、いわゆる「友・敵論」から、同伴者をプロレタリア陣営に包摂しようとする考え方は、必ずしも党中央委員会のラップ解散宣言によって突然表面化されたわけではない。一九三〇年におけるいわゆる「ハルコフ会議」は、ラップの方針から逸脱した反主流派を厳しく規制し、「社会主義」という仮面を被って堂々とまかり通っている隠蔽されたファシズム、つまり社会ファシズムと一般に言われているあの陰險なタイプ」の思想との徹底的な闘いをスローガンにかかげている反面、祖国ソヴィエトの防衛と知識人の動員という、「より広範にして具体的政治的プログラムの採用」を強調している点がそれを示している。「より広範なプログラム」が一体何であるかは、後述するこの会議において採択されたアメリカ支部に対する行動要請の決議が端的に示している。

アメリカにおける共産党の文化活動は次の三つの必要性によって条件づけられていたと考えられる。(一)ソヴィエト経済五ヶ年計画を基礎とする文化活動の完全な踏襲とコミンテルンへの完全な服従。(二)コミンテルンにおける「二元主義」方式の全面的採用。(三)厳格なイデオロギー的肉体的訓練を身につけることによって、来るべき革命への行動力を貯えること。アメリカ共産党はこれら三つの要求実現のために、一九二九年から一九三一年にわたって、一般に「労働者文化連盟」と呼ばれる文化機構を創設した。この組織の基盤になっている「二元主義」方式は、アメリカ共産党の文化面における指導者の立場にあり、『ニュー・マツセズ』の論説委員を兼ねていたマイケル・ゴールドの次の言葉の中に明確に読みとることが出来る。「然り。資本主義文化は存在している。そ

の主たる目的は、大衆をねむらせることである。大衆をいつ迄も幼児にとどめておくことである。頭の中をナンセンスなもので一杯にして、思考する余裕を与えないことである……今必要なことは労働者の文化を構築し、資本主義文化の毒を殺すことである。大衆は催眠術にかかっているのだ。われわれの任務は大衆を目覚めさせることである<sup>(15)</sup>。

この「労働者の文化」は「資本主義文化」に対立するものであって、後で述べる人民戦線戦術における「文化」とは異質のものであり、共産党のプロパガンダにおける合理的支配の下に置かれたものである。この労働者文化連盟(WCF)は、少なくとも二十数ヶ所に及ぶ事務局を持ち、二百数十団体をその傘下に置き、現実には大衆に対する娯楽及び教育の機関の働きをした<sup>(15)</sup>。そしてこの連盟の一部局として、専門的作家組織の目的で発足したのが革命的作家連盟(RWF)であり、一九三〇年十月のハルコフ会議の決議に基づいて創設されたものである。この会議の決定が目的としたことは、全ての共産主義作家が組織する団体を、単一のコミンテルンの機構、つまり革命的作家国際連盟(IURW)に統合することであった<sup>(15)</sup>。RWFは十一の団体によって組織されていたが、その大半が英語以外の外国語の団体であったために、WCFの有効なプロパガンダ機関となることが不可能であった<sup>(15)</sup>。然しこのRWFの一つの重要な組織の一つにジョン・リード・クラブがあり、ニューヨークを中心とするこのクラブは、一九三四年には全国でその会員数が千二百人を数えたと言われている<sup>(16)</sup>。ジョン・リード・クラブの活動は当時にアメリカ共産党の完全な支配下にあつて、そのため、党の戦術的誤りがそのままこのクラブの欠陥となつて露呈することになる。

言う迄もなく党の情宣機関として有効な働きをするためには、外国語の団体ではほとんど無意味であつて、こ

の点からもニューヨークを中心とするジョン・リード・クラブが中核的存在として重要な意味を持つようになったのである。ジョセフ・フリーマン及びマイケル・ゴールドに指導されたニューヨークのこの革命的作家集団は、その機関誌とも言うべき『ニュー・マッセズ』を発行していた。(一九三四年から『ペーティザン・レビュー』が一時的ではあったが正式の機関誌になった)。この「ニュー」という修飾語は、マックス・イーストマン、ジョン・リード、フロイド・デルといったボヘミアン達によって発行されていた『マッセズ』と区別するためのものであるが、名実共に新しさを目指すものであった。『マッセズ』の知的伝統は、これを受け継いだ『リベレイター』と共に、反知性主義の傾向があまりにも濃厚であったために、知識人に対するアピールの点では効果的ではなかった。しかも一九二〇年代知識人の間には共産主義に興味をいだく者はむしろまれであった。グランヴィル・ヒックスによると、「たとえわれわれが経済機構の変革が望ましいものであると考えていたとしても……それが必要なのであり、可能であるとはとても考えなかつた」<sup>(17)</sup>時代である。

『ニュー・マッセズ』は『マッセズ』と同じく、反体制の思想では同一の次元に立つものであるが、後者が個人の自由な発言の場を完全に保証していたのに対して、前者は個人よりも集団としての活動及びそれを基盤とする発言に重点が置かれている。一九二九年迄の『ニュー・マッセズ』のラディカリズムには、まだ本質的な個人の自由への情熱や、異常なるものへの関心と喜び、といった非党派的なものがみられるが、一九三〇年頃から集団化の傾向が強まり、政治参加の色彩が強くなるのは一体何故であろうか。

マイケル・ゴールドは若い有望なプロレタリア作家の育成を目的として、一九三〇年「作家のための新しいプログラム」を発表し、ジョン・リード・クラブの各地方支部に対して今後の活動方針の提示を行った。(一)作家は単

一の産業にとどまらず数年間これを学習し、「そのエキスパート」になり、それによって、「ブルジョア知識人的傍観者としてではなく、そのインサイダーとして」この状況が描けるようになること。(一)情宣活動としてのちらし作成に参加することによって、「真実なるものに根をおろす」こと。(二)これが達成されることによって、「全国の作家集団」は「産業における通信員」となり、アメリカ全産業にわたっての文化戦線からの報告が可能となる。(四)このため、『ニュー・マッセズ』は「産業を基盤とする」労働者階級の意見発表の場とする。<sup>(19)</sup>

言う迄もなく全ての若い急進的作家がこれに同調したわけではないが、<sup>(20)</sup>大多数の者はこのプログラムに新しい希望を見出した。このプログラムは、「ラップの独裁」時代における「社会的要請」が、党の正式な方針として、作家に対して「特別工作員」たること、「芸術的旅団」を構築すること、各種労働計画に参加し、それをルポルタージュすること、などを要請した、いわば「事実の文学」優先を範としていることは明らかである。<sup>(21)</sup>

然し、ソヴィエトにおけるこの方針の実践活動とアメリカにおけるその具体化を考えた時、両者の社会体制の差が無視されているところにこのプログラムの大きな誤りの一つがあった様に思われる。共産党が全産業を掌握し、作家の側からすれば自分が如何なる産業に配置されようとも、それが即「社会的要請」に応えるものとなるソヴィエトと、当時ようやく微力ながら一般にその存在を意識させることが出来るようになったアメリカとは、同一手段による同一目標の達成は無理な話であるからである。

同じことがジョン・リード・クラブの活動そのものについても言える。先にふれた「二元主義」方式による厳格な思想統制は、その目的とは逆に、広範な作家及び読者層をひきつけるどころか、彼らからこのクラブを孤立させることになってしまった。ジョン・リード・クラブの主力は、情宣パンフレットの作成、「社会的」需要と

は無関係の出版社からの出版、読者層の薄い定期刊行物、更にはオーフ・ブロードウェイのように観客の集まらない劇場での上演などにあつたからである。<sup>(22)</sup> アラン・カーマーの「この頃のあらゆる理論とその論争は、芸術はプロパガンダであるということ、文学は武器である」という功利主義的発想に基づくものである、という回想はこの辺の事情を端的に示している。若い作家が会員の大半を占め、革命を指向する熱っぽい空気が常に流れていたのはそのためである。商業ベースに乗った作家や批評家の動員による世論の喚起は、ジョン・リード・クラブの方針（共産党の方針）からみて全く可能性が無い、という非難が当然起つて来るのであるが、この問題については後述することにする。

さて、この様にして栄光のプロレタリア文学の誕生を宣言し、自からその旗手となつたマイケル・ゴールドは、「あなた方のシェイクスピアは何処にいるのか」という会員の質問に対して、「あと十年待ち給え。われわれのシェイクスピアは今誕生しつつあるのだ……何百というシェイクスピアの誕生を約束しよう」と断言したのである。更に又、ハーマン・スペクターの様に、アルフレッド・クレインボークの詩を批評するにあつて、エズラ・パウンドやウィリアム・キャロルス・ウィリアムズなどにみられる「悪臭」を指摘し、「勤労者学園の短期コースを受講すれば、この詩人は、素朴さをよりよい仕方でも描出出来るようになるであろう」と平然と述べていることは、決して特殊な出来事ではなかつたのである。<sup>(26)</sup>

## 一一 ハルコフ会議とその後のアメリカ知識人の動向

一九三〇年、「革命文学国際部会第二回世界大会」、通称ハルコフ会議が開かれ、アメリカからは、マイケル・



ゴールド、A・B・マギールを中心とするジョン・リード・クラブの代表六人<sup>(分)</sup>が出席した。この会議はスターリン独裁時代の文化的頂点をなすものであり、ラップの理論的指導者であり、スターリンの信頼の最も篤いレオポルド・アウアーバツハが議長を務めた。先にも少しふれた様に、この会議の目的とするところは、より広範にしてより具体的な行動方針を打出すことであり、その一環として、「アメリカ支部」に対する十項目の決議要請が発表されたのである。この決議が本質とするところは、ジョン・リード・クラブ及び『ニュー・マッセズ』がそのプロレタリア的基盤を拡大し、「全ての友好的知識人を革命の戦列に参加させる」<sup>(28)</sup>努力の要請であった。「黒人大衆の中における文化活動」の不充分さ、マルクス主義的批評への無関心が指摘され、「全ての言語による文化団体」の全国的規模の組織編成、労働者との接触の緊密化、各地方のジョン・リード・クラブ及び外国の革命的文化団体との連絡の強化、大衆に対する情宣活動の更なる活発化を要請した。そして、最後に、『ニュー・マッセズ』の最大の任務として、「全ての点において、全国の階級意識に目覚めた労働者及び革命的知識人の文化的組織」<sup>(29)</sup>化への努力を傾注することを強く要請した。これも既にふれたことであるが、これらの決議は、その当該国の事情に即応した戦術であるよりも、画一的なソヴィエト・パルチザンによる戦線の統一が基本的要請になっており、このことが後の運動の大きな失敗の原因ともなるのである。然し、この決議で重視しなければならないことは、一方において「社会主義ファシズム」との容赦なき闘争を唱えるセクト主義でありながら、他方においては広範な労働者及び知識人の結集を呼びかけると言った、孤立からの脱却が自覚されたことは大きな進歩であると言わなければならない。

この大会において、国際本部書記長のハンガリーのベラ・イレスが贈られたソヴィエト赤軍のユニフォームを

着て挨拶し、「われわれは国際プロレタリアートの不滅の大部隊を構成する、手にペンを持った兵士である」、とのべたことから、アメリカから出席した代表の一人マックス・イーストマンは、この大会を「ユニフォームを着た芸術家達」の大会と呼び、重点的事項として次の七項目をあげている。(一)芸術は階級的武器である。(二)芸術家は、「個人主義」と厳格な「規律」に対する恐怖心をプチブル的態度として放棄すること。(三)創作は、体系化、組織化、「集団化」されねばならず、軍事作業と同じく参謀本部の指令に従って遂行すべきこと。(四)これらは、「共産党の入念にしてかつ不動の指揮の下に行なわれるべきこと」。(五)全世界の芸術家及び作家はソヴェエトの経験を鏡とし、プロレタリア芸術の創作方法を体得すること。(六)「全てのプロレタリア芸術家は弁証法的唯物理論家でなければならぬ。創作芸術の方法は、弁証法的唯物論の方法である」。(七)「プロレタリア文学は必ずしもプロレタリアートによって創作される必要はなく、プチブル出身の作家による創作も可能である」。プロレタリア作家の主たる任務は、これら非プロレタリア作家が「そのプチブル性を克服し、プロレタリアートの視点を受容」出来る様援助すること。<sup>(38)</sup>

プチブル出身の作家にも門戸開放をするということとは、一九三五年のディミトロフの人民戦線論にみられる様な、反ファシズム連合戦線の結成という、いわば寛容な態度を示したものでなく、彼らをプロレタリア革命もしくはマルクス主義哲学の軌道に沿って「再教育」することであって、例えばジョン・ドス・パススはその有力な候補にあげられている。ドライサーやシャーウッド・アンダーソンの様に、この戦術によって急激に左傾して行く作家もあつたけれど、この会議がアメリカ作家に与えた影響はほとんどみるべきものがなかつた。「アメリカの巡礼達」が「弁証法的革命というスタリニズム教会」に詣でた様だ、といつてイーストマンは

これを皮肉っているが、モスクワの要請とあれば、「健全なる自己批判」の名の下に平然と方針を変更するその後の行動をみれば、これが決して誇張でないことが理解出来るであろう。

ところで闘争方針の明確化及び具体化の要請に応えて、『ニュー・マッセズ』は矢継ぎ早に声明を発表した。ハルコフ会議迄は、いわゆる「目覚めた知識人」の参加を固く拒否していたジョン・リード・クラブは、若い知識人層を獲得する必要から、たとえ一〇〇パーセントの一致が得られなくとも、「再教育」によってプロレタリア陣営に改宗出来得る部分に対して積極的に働きかけなければならない、という立場から、マイケル・ゴールドは、「同伴者に対して全てのドアを開放すべきである。われわれは彼らが必要としている。われわれは、彼のブルジョア思想によって悪影響を受けるかも知れないという恐怖心を持ってはならない。この様な恐怖心は、未成熟の一つの証拠である。われわれ自身の幹線道路通行能力に対する疑念と同じものである」、と発表した。<sup>(32)</sup>

ここでもう一度アメリカ知識人の置かれていた精神の風土に目を向けてみることにする。

一九二九年の大恐慌は「最後の審判の前兆として、大地の裂ける」思いであった、と言ったのはエドモンド・ウィルソンであるが、その時の印象を次の様に記している。「暗黒のとばりが降りた様であった。然し、大企業時代に育ち、常にその野蛮性と切り捨てごめんの仕打ちに憤懣やるかたない作家や芸術家にとって、この時代はゆううつな時代ではなくて、刺戟のある時代であった。われわれは、この様な馬鹿げた巨大な欺瞞が知らない間に突然崩壊したことを知った時、狂喜せざるを得なかった。これはわれわれに新しい自由の思想を与えてくれた。……口を開けばわが国の体制は健全であるとわれわれに語り続ける様な企業家の大統領をホワイト・ハウスにもっている以上……アメリカの共和制は危機である、とわれわれは思った。だからこそ、われわれはソヴィエ

ト連邦の果した偉業に増々深い感銘を受けたのである」<sup>(33)</sup>。

丁度この頃、マイケル・ゴールドは新進のまたは無名の若き作家達に向つて、「若き作家達よ、左を向こう」<sup>(34)</sup>と熱く呼びかけ、共産主義の正しさを説き、更に十二月には、来るべき大企業との社会革命の闘争、つまり退行勢力と進歩勢力の激しい闘争に備えるために、個人主義か集団主義か、とその選択を迫った<sup>(35)</sup>。然しこの呼びかけも知識人に大きな変化を与えるまでには至らなかった。

ところが一九三二年、『モダン・コータリー』が実施したアンケート「アメリカ作家は何処へ行く」<sup>(36)</sup>に対する彼らの反応は、積極的政治参加の意志と共産主義若しくは共産党に対する肯定的姿勢がみられる点で、大きな思想的転回がみられるのである。このアンケートは質問が短刀直入であったためもあるであろうが、アメリカ知識人の左傾の徴候を知る上で貴重な資料の一つになっている。関心のある問題点と作家の返答をあげておこう。

「アメリカの作家は直面している社会的危機に、如何なる立場をとるべきか」に対するロス・パソスの返答は、作家の意志の有無にかかわらず、社会的危機の方から作家に襲いかかってくるとし、「生産者及び労働者として、報酬を受けて搾取集団のために宣伝活動をしていない作家（ほとんどは受けていると思うが）であれば、必然的に、生産労働者との共通の運命を認識するであろう」ということであった。更に、「共産黨員になることによって、芸術作品の深みが増すと思うか」に対して、現状では黨員にはなり得ないと断りつつも、「個人的には社会党やその他の革新政党にそれなりの価値を認めるけれども、現在社会黨員になることは、丁度代用ビールを飲むのと同じ効果が得られるだけである」<sup>(37)</sup>と断言している。シャーウッド・アンダーソンの場合は更に断定的で、「ドラマと人生全てが含まれている社会の危機」は芸術そのものであること、共産黨員になることによって「芸術家は

自分が闘争の一部であるという自覚を持たねばならない」と答えている。しかも、「芸術家は、自分の信ずることのために進んで命を捧げるものである<sup>(38)</sup>」と社会党の優柔不断を批判した。又、グランヴィル・ヒックスは、現在社会党員になることは、結果的にはプチブル階級に加担することであり、「社会主義には、基本的誠実さが欠けている……作家にとって、この種の誠実さの欠如程悪質なものはない<sup>(39)</sup>」と共産党の「誠実さ」と作家の「誠実さ」を同一視した。

社会党が信用出来ないものであり、直面している社会問題に対する解決策を知らない、単なる「牧師の様な真面目さ<sup>(40)</sup>」しかもたない「プチブル政党」である以上、共産主義もしくは共産党に対する期待が生まれてくることは、「欲求不満を持った知識人」にとっては一種の物理的法則の様なものである。然し、何れにしてもこれは「逃避」から「参加」への一つの大きな転回であり、一九三九年の独ソ不可侵条約による幻滅に至る迄の「知識人全盛期<sup>(41)</sup>」を形成することになる。

一九三二年九月、『ニュー・マッセズ』は、「何故私は共産主義者になったか」というシンポジウムを発表し、宣伝効果の増大を図った。全員が共産党員ではないが、その同調者を含めて七名が解答している。宣伝効果の増大を図った、と言ったのは、「知識人の左傾」及びそれに至る「自伝」を求めたものでありながら、『ニュー・マッセズ』の見出しには「共産主義」という言葉が堂々と掲載されているからである。解答者の大半は『モダン・コタリー』と重複しており、解答の仕方が様々であるためなんとなく明晰さに欠けるきらいがあるが、「左傾」についての動機を語っている点で、やはり重要な資料である。例えばウォールド・フランク（彼は一九三五年の全米作家会議において結成された全米作家連盟の初代会長に選ばれた）はこの動機を七つにわけて、  
 (一) 中産階級

及び「直接間接に中産階級の価値感と思想行動の一致している知識人グループ」に対する信頼感の喪失。(二)「良きマルキストであるためには、マルクス以上に創造的でなければならぬ」と語ったこと。(三)「革命的プロレタリア階級は共産主義社会建設のための、主たる道具である」というマルクス主義に同意すること。(四)全ての知識人は「知識人として、階級闘争に於て、戦闘的役割を演じなければならない」という自覚。(五)象牙の塔から出て、「具体性を持った同志の言語で、人民との連帯を明確にする」必要のあること。(六)「一刻の猶余も許されない」世界的危機、(七)「革命的、文化的価値の創造者」としての芸術家の役割が、「かつてみられなかった程今日重要になっていること」<sup>(43)</sup>、をあげている。

この様な情勢の中にあつて、『ニュー・マッセズ』は、翌年の二月、ハルコフ会議において採択された十項目要請に応えるものとして、「自己批判」に加えて、具体的にして且つ広範なプロレタリア文化運動推進の決意を表明した<sup>(44)</sup>。更に六月には、「全米で十万人」と推定される文化団体の全国統一組織——合理化——を計画し、その前段階として、ニューヨーク及びその近郊の「民主的文化団体」に対して、大会への結集を呼びかけた<sup>(45)</sup>。続いて開かれた大会において議長団が選出され<sup>(46)</sup>、全米的規範の大会開催を決議した。マイケル・ゴールドは永年の念願が「遂に達成された」と喜び、「アメリカ革命的文化的文化に向けて」なる論説を『ニュー・マッセズ』に発表し<sup>(46)</sup>、新たな決意を促した。

「芸術は武器なり」という見出しで、「労働者文化連盟」の方針が発表されたのは八月のことである。資本主義文化を帝国主義文化と規定し、アメリカに代表される資本主義的腐敗の文化と、新しいソヴェエトの建設的文化とを明確に対比し、「アメリカ合衆国におけるプロレタリア文化発展の可能性は、資本主義社会の大黒柱をゆ

さぶり、労働者のみならず多数の知識人をも急進化させ、かつて支配階級によって入念に育んで来た繁栄という幻影、つまり、アメリカの生活水準に関する幻影を、完全に破壊した経済危機によって、急激に増大した<sup>(47)</sup>と高らかに宣言した。

この頃の知識人の急進化の徴候は、主として労働争議や政治活動の面に現われている。先ず第一にあげなければならぬのは、一九三一年夏の、ケンタッキー州ハーランの労働争議の救援、若しくは調査を目的として結成された「ドライサー委員会」である。共産党を中心とする「民主団体」の強力な援助と、これらによる知識人への訴えによって、元来が強情なドライサー及びドス・パソスが腰を上げたのであるから、これが他に与えた影響は少なくなかった。(ついでながら、ドライサーは一九二七年のソヴィエト旅行以後急激に左傾し、この時迄には、「世界の様々な問題、特にアメリカの諸問題に対する私の解決策は、共産主義を<sup>(48)</sup>おいてほかにない」と断言するところまで「成長」していたのである。)この委員会は、「特別作家委員会」とも呼ばれ、共産党の組織する「政治犯救援全国委員会」の下に設置されたものであり、ドライサーの他、ドス・パソス、チャールス・ラムフォード・ウォーカー、サムエル・オーニッツ、レスター・コーエン及びメルヴィン・P・レビーがその主たる構成メンバーであった。この委員会が「犯罪的サンジカリズム」の嫌疑で告発された時、知識人を大きく揺さぶった数年前のサッコ・バンゼッティ事件の時にはなんの関心をも示さなかったシャーウッド・アンダーソンは、「われわれが今必要としているものは、更に戦闘的なサンジカリズムである<sup>(49)</sup>」、と叫ばずにおれなかったところから、知識人の社会的現実に対する憤懣がいかに激しいものであったかがわかるであろう。

この委員会は翌三二年にも結成され、ウォールドー・フランクを委員長に、マルカム・カウリー、クンシー・ホー、

メアリー・ヒートン・ボース等からなり、エドモンド・ウィルソンも『ニュー・リパブリック』の記者として同行した。ドス・パソスの『U・S・A』における「われわれは二つの国民である」という言葉は、今や現実となつた。エドモンド・ウィルソンは「階級闘争は現実存在する」<sup>(8)</sup>を発表して、この言葉が現実であることを示した。この様にして、一九三〇年から一九三六年の『ニュー・マッセズ』には、ドライサー、シャーウッド・アンダーソン、ドス・パソス、エドモンド・ウィルソン、アースキン・コールドウエル、ジェイムズ・T・フアレル、少し遅れてヘミングウェイ等々と言つた著名作家批評家が登場し、同伴者知識人の動員という目的は大成功を収めることが出来たのである。<sup>(9)</sup>

### 三 知識人の動員と、「革命作家連盟」による『ニュー・

#### マッセズ』及びジョン・リード・クラブ批判

ジョン・リード・クラブ及び『ニュー・マッセズ』の同伴者知識人に対する門戸開放策と、社会状況の悪化によって、その後クラブはその規模を大きく拡大し、「革命的作家国際連盟」の方針に沿って、世界各国の作家知識人に向けて各種の声明文を発表したことは先にふれた通りである。労働者文化連盟の結成後の一九三二年五月の、第一回ジョン・リード・クラブ全国代表者会議は、「革命的作家国際連盟」の提案によって全米十三のクラブから三十八名が集つて開かれたが、この時発表された「ジョン・リード・クラブ宣言草案」は、「腐敗した資本主義政府」を激しく攻撃し、「目覚めた中産階級、知識人階級」に向つて、「資本主義社会の暴力と欺瞞、腐敗と頹廢を隠蔽しようとしているブルジョア思想との訣別」<sup>(10)</sup>を訴えた。起草の中心であつたジョセフ・フリーマ



ンは「同伴者」及び「知識人」にふれ、クラブ会員であつても非黨員は、全てこの「同伴者」カテゴリーに属し、末だ運動の外にいる多くの「知識人」は、「ジョン・リード・クラブ会員と同じ背景をもつものであり、従つて潜在的には共通の未来をもつものである」と述べた。更に、エドマンド・ウィルソンやウォールド・フランクの様な「いわゆるマルクス主義批評家」〔彼らはマルキシズムを口にしているが、あまり理解していない。然し運動に対する支持は積極的である〕をこちら側にひきつけるために、ジョン・リード・クラブは知識人に迎合したのではなくて、むしろ、「われわれは、共産党へのわれわれの姿勢を受け入れる様、知識人に対して要求しているのである」と語つたと言われている。<sup>(53)</sup> 又、マイケル・ゴールドは、「ジョン・リード・クラブ結成の当初から、このクラブが広範な中産階級知識人労働者によって組織すべきである、という少数意見の一人」<sup>(54)</sup>であつたと嘘ぶいた。

知識人と共産党との具体的な一致行動は、先のハーランにおける炭坑ストライキ（二十年代にはサッコ・バンゼツァイ事件があるが）の時の「ドライサー委員会」があるが、政治参加を示す画期的行動として、一九三二年五月に結成された「独立作家委員会」及びその拡大組織としての「フォスター及びフォードのための専門家会議」の結成がある。エドマンド・ウィルソンのアパートにおける会合には、ドス・パソス、シャーウッド・アンダーソン、アースキン・コールドウェル、シドニー・ホワード、マルカム・カウリー、シドニー・フック、グランヴィル・ヒックス、マシュー・ジョセフソン、ホレース・グレゴリー、ラングストン・ヒューズ、レオニー・アダムス、ルイス・アダミック、ジョセフ・フリーマン、といったそうそうたる作家批評家が集つた。<sup>(54)</sup> フォスターが主賓として招かれたのは言う迄もない。来たるべき大統領選挙にこの団体が推す候補であつたからである。この集会は直接的に共産党が主催したものではないが、<sup>(55)</sup> 現実には、ジョセフ・フリーマンがその声を代表していた。党書記

長のアール・ブローダーは、「この国の知識人の最高峰がこの様なかたちで労働者の運動に参加したことは、知識人の間に真の精神的革命が起りつつある兆候である」としてこれを大歓迎した。<sup>(56)</sup>

大衆へのアピール草案はジェイムズ・ローティとマシュー・ジョセフソンの二人が担当し、共産党本部からの修正意見をもり込んだ形で、マルカム・カウリーがこれを完成した。かくして発表されたのが、作家、芸術家、専門家、といった知識人に対する「公開書簡」である。<sup>(57)</sup> 経済民主主義における利潤追求の価値に代って、人間的価値を基盤とする新社会建設に向っての、労働者大衆との連帯強化の決意を促すものであり、「われわれは労働者の党と行動を共にしている……現在の経済体制における混乱、とてつもない浪費、惨状、これらに抗議する唯一の方法は、共産党候補に投票することである」と結んでいる。<sup>(58)</sup>

「知識労働者」と「筋肉労働者」との連帯ということは、本来反知識人思想の強いアメリカの左翼にあって、真に未曾有の出来事であった。この年のアメリカ共産党のスローガンは、失業労働者農民の救済、社会保障、銀行の国有化、といった穏便な福祉国家建設であったことも、<sup>(59)</sup> 「中産階級知識人」の動員促進の大きな要素であったことに違いないが、<sup>(60)</sup> ドス・パソスが回想して語っている様に、この運動は、「共産党のアメリカの政治革命を期待するものではなく」、<sup>(61)</sup> 「公開書簡」に示されている様に、頹廢した資本主義社会に対する抗議という点での連帯とみるのが妥当である。エドマンド・ウィルソンが、共産党のドグマに反撥を感じる「進歩的知識人」に対して、「価値あるものを成し遂げたいと思うならば、共産党から共産主義をとりあげよ……究極の目標は」共産党の支配ではなくて、「生産手段の国有化である」、<sup>(62)</sup> と述べたことは、この辺の知識人の精神風土を端的に物語っている。現実の社会状況に強い不満を持つ多くの知識人を吸収した共産党の強みは、(一)行動方針の具体性、(二)訓

練の行きとどいた組織力、(三)論理一貫した教義、(四)ソヴィエト連邦という生きた範例<sup>(62)</sup>にあったと言われている。

知識人の左翼への傾斜と離脱の問題は、別の機会に個別的に論ずるつもりであるが、ここで、もう一つだけ別の観点からの傾斜の動機の例として、マルカム・カウリーの釈明をあげておくことにする。

「当時作家の間には崩壊感覚をもった者が沢山いた。事実上の神経衰弱である……この様な心理的問題をかかえた人達は、自分以外のところになんらかの救済を見出そうとしていた。そして、大衆若しくはなんらかの集団と連帯すること、しかも、指導者としてではなく、新しい夜明に向って行進する大衆の単なる一員となることにそれを見出したのだ。」<sup>(63)</sup>何か新しいことが始まりつつあるという予感、若しくは期待がその基本的動機であったのだ。

この様に知識人の政治参加（反体制的）が活潑化しつつあったその矢先、ハルコフ会議決議に基づいた『ニュー・マッセズ』及びジョン・リード・クラブ批判が『インターナショナル・リテラチュアー』に発表された。<sup>(64)</sup>一九三一年の行動が大概良好であることを認めながらも、個別的に検証すると、行動決議を忠実に実行していない、という主旨のものであった。八頁におよび、しかも個別批判を加えた厳しい総括であるが、全般的には新鮮味のあるものではなかった。然し、『ニュー・マッセズ』は三二年の九月号において、「編集ノート」としてこれを報告し「自己批判」<sup>(65)</sup>した。A・エルストラトローバの『ニュー・マッセズ』批判の中で特に指摘しておかなければならない点は、「最も重大な欠点」として、「様々な社会ファシジムの代弁者に門戸を開放していること」、又、「共産党から共産主義をとりあげよ」、と訴えて知識人の結束を促したエドモンド・ウィルソンと『ニュー・リパブリック』をファシズム勢力への加担勢力としてとらえていることである。社会ファシストとして指摘され

たのはカール・バートン、マックス・イーストマンであって、この様な巧妙に「陰蔽された、反プロレタリア・イデオロキスト」を反動と規定し、『ニュー・マッセズ』からの完全な追放を要求した。然し、このことは中産階級知識人との共闘を否定的運動としてみなしているのではなくて、むしろ、知識人のプロレタリア陣営への加入を促進する努力の不足を指摘されているところからもわかる様に、彼らを知識人獲得競争におけるライバルと規定したと考えるべきである。総括的に批判の対象になったのは、(一)政治参加の不充分さ、(二)理論的指導力の欠如、(三)「労働者文化」会議組織運営に対する消極的姿勢、(四)マイケルゴールドの理論的弱点、(五)反ファシズム勢力の組織化への積極性の欠如、の五点であった。

エドマンド・ウィルソンの『ニュー・レパブリック』を、ファシズム側への加担勢力と判断しているのは、もともとこれら知識人の進歩性は、具体的な政治運動と言うよりも一種の「道徳的な怒り」であり、フォスター支援活動にしても、結果はともかくとして、フォスター個人に対する信頼感から出ているものである、という点を考えれば無理からぬことである、と言えるかも知れない。彼のフォスターに対する信頼感の強さは、一九三〇年の通称「フィッシュ委員会」なる下院における共産主義活動調査委員会での印象記の中に明らかである<sup>(66)</sup>。しかもフォスター自身の「常に第三インターから警戒の眼でみられていた<sup>(67)</sup>」という言葉から判断すれば、彼に対する知識人の支援の増大は、手放して喜べる性質のものでなかった、と想像出来る。要するに、ウィルソン、イーストマン、カール・バートンの行動は一種の利敵行為であり、異端的行動であったわけである<sup>(68)</sup>。

これらの批判に応えるかの様に、デヴィッド・ラムゼーとアラン・カーマーは「V・F・カルヴァートンのマルキシズム」と題する批判を発表した。一九二九年の「知識の砂漠」及び三十年の「ヒューマニズムⅡ文学的フ

「アンズム」に示された彼の進歩思想は、一九三〇年八月以後反動化した、という主旨であった。<sup>(69)</sup> 又一九二八年の大統領選挙における彼のフォスター支援は、「共産主義に対する讃辞から来たものではなくて、個人的人格に対する讃辞から来たものである」、とワイルソン批判と同じ評価を下した。

マックス・イーストマンに対する批判はヨシユア・キューニッツが行った。主として『ユニフォームを着た芸術家達』に関して、この記事は事実誤認によるものであるという点からの反論乃至は攻撃であり、彼自身の「自覚の有無にかかわらず、マックス・イーストマンはユニフォームを着た作家であり」、われわれと「違うのは、赤軍のユニフォームでないだけだ」と利敵行為を批判した。更に、「相克する二つの世界の、耳を聳せんばかりの衝突の真只中にある、疲れ果て、唯狼狽するプチブル急進主義者に典型的な、青白い、逃避的、芸術のための芸術主義者」ときめつけた。

『ニュー・マッセズ』批判の中でもう一つ目立つ点は、プロレタリア及び革命的文学の理論的立遅れが指摘されていることである。然し、公式ドグマとしての「プロレタリア文学」なる呼称が用いられたのは、一九三〇年のハルコフ会議の時が最初であって、その数年前には、「プロレタリア文化」の存在をめぐって、これを肯定するブハーリン派と、これを否定するトロッキスト派の激しい論争があったばかりであることを考えれば、この用語のアメリカ定着には相当の時間が必要であることは明らかなことである。<sup>(70)</sup> 元来この用語は、コミンテルンの世界情勢分析による「第三期論」の中に示された、どちらかと言えば恣意的な用語であって、定義を試みれば増々あいまいになる、という性質のものであった。プロレタリア文学はプロレタリアが書く文学のことか。若しそうだとすると、政治的内容の面で不十分なものがあるのではないか。この文学はプロレタリアの生活を主題とする

文学であろうか。それなら革命へのクライマックスは望み得ないのではないか。又この文学は読者をマルクス主義的世界観に導入する目的をもったものであろうか。それなら作家はプロレタリア出身である必要がないのではないか……と言った不明確なものである。

グランヴィル・ヒックスが「アメリカ批評の危機」を発表したのは、プロレタリア的基盤に立つ批評こそ人生の真にして明晰な解釈が可能であるとして、印象主義批評、ヒューマニズム批評を批判すると共に、ブルジョワ知識人をも含めた文化統一戦線の結成を提唱した。又エドウィン・シーバーは、最近の若いマルクス主義作家達にふれ、崩壊する資本主義の現実を眼前にして具体性のある階級意識に目覚め、予言者から実践者に移行しつつある、と明るい希望を表明した。

然し、アメリカにおけるプロレタリア文学がある程度の方向をもつようになるのは、一九三五年の第一回全米作家会議と、これを契機とした、グランヴィル・ヒックス編『合衆国におけるプロレタリア文学』の発刊の時であると言えよう。

#### 四 ジョン・リード・クラブの解散と

##### 第一回全米作家会議の開催まで

アウアーバッハを中心とするラップの目的とするところは、経済五ヶ年計画に対する文化面の促進と、そのためにプロレタリア文学運動に敵対する全ての勢力を徹底的に批判することであった。ラップの批判は絶対であり、一度その対象になることは、文字通りの肅清に等しかった。この敵しさは、マヤコフスキーの自殺が象徴的に物

語っているとされている。I・M・グロンスキーのラップ批判は、この様なラップの偏向を党の立場から行ったものである。「党はラップの指導者に対して、社会主義社会建設の目標達成のため、その負わされた任務を率直に再点検する必要があることを繰り返し主張して来た。ラップは行政機関ではなくて、イデオロギーの教育機関であることを再三再四指摘して来た。自己批判の徹底と主なる場におけるプロレタリア文学及び批評が、全ての面で連帯することの必要性を説いて来た。然し、これらの直接的にして緊急の指摘はあまり実行されているとは言えない<sup>(78)</sup>」というのである。ハルコフ会議におけるアウアーバッハの「政治的及び創作諸問題に関する決議」報告は、「全てのプロレタリア芸術家は、弁証法的唯物主義者でなければならない。創作芸術の方法は、弁証法的唯物論の方法である」ことは先にふれた通りであるが、この理論の硬直化は、単純な、裁断的「友・敵論」に結びつく危険性をもっていた。作家の意識的無意識的の何れかにかかわらず、その「過ち」に対して何らの助言も与えないばかりか、彼を完全な敵に仕立てあげるといふ傾向であった。「ラップは決議に同調している人達を疎外してしまっただばかりではない。……誰が何を出版するかを決定する」絶対権力を持った「行政機関になりあがってしまった<sup>(79)</sup>」のだ。

本来、党の道具としての存在が、ソヴェィエト文学全体の進歩と利益のためではなく、個人もしくは特定セクトの利益のための機関となってしまったこと、又、一九二八年以降三十二年迄、プロレタリア文学の売行きが著しく低下し、革命前の文学に対する需要が増大したことなど、期待とは反対の結果が生まれつつあることに対して、党はこれを放置することは最早不可能のところ迄来ていたのである。この様にして、一九三二年四月、共産党中央委員会声明<sup>(80)</sup>によってラップは解散し、全ソ作家連盟を組織し、一九三四年、第一回全ソ作家会議を開催し、党

活動の合理化を達成したのである。この過程は、ジョン・リード・クラブの解散と全米作家会議の開催ならびに全米作家連盟の結成の過程を考へる場合、絶対考慮に入れなければならないことである。

アメリカ共産党の知識人動員戦術は、一九三〇年のガストニヤにおける紡績工場ストライキの時の「南部における政治犯救援緊急委員会<sup>(82)</sup>」を初めとして、一九三四年の「スコットボロー救援委員会」に至る迄、その社会問題、政治問題に應じて臨機応変に、しかも党の指導権を失わない様な形でとられた。<sup>(83)</sup>更に又各地の労働争議の際のピケットラインに著名作家をかり出す戦術は、プロバガンダとしてかなりの成功を収めた。例えば、マシュー・ジョーセフソン、マルカム・カウリー、ルイス・アダミック、ジェイムス・T・ファイル、ケネス・バーク、クリフトン・ファディマン等々の参加した、ニューヨークのマコーレー出版社の労働争議をあげることが出来る。<sup>(84)</sup>「著名人の名前をストライキと結びつける戦術は一九三〇年代の特徴である。……文学者及び知識人有志が、エンゲルスが且つて最終戦<sup>(85)</sup>のための軍事教練場と呼んだ労働者の経済闘争に、無垢なアマチュア精神で参加したのだ。然し、彼らの関心は一時代なものであった。後年転向し情報提供者となった且つてのラディカル達は、下院非米活動委員会に対して、例えばマコーレー出版社のストライキの様な事件は、著名作家を引き立て役としてかり出そうとする共産党の陰險な計略であった、と嚴肅に証言した。然し、われわれにとって、この様な行動は楽しいものであったし、われわれは、なんらかの形で役立てばよいと思つていた<sup>(86)</sup>」と言つたのはマシュー・ジョーセフソンである。然し、この種の政治活動に参加した作家知識人が、エドモンド・ウィルソンやグランヴィル・ヒックスの様に、共産党に「使われていた」とみるか、それともマシュー・ジョーセフソンの様に、自発的に、しかも楽しんで参加したものであるとみるかは、その後の彼らの置かれた思想的環境によつて異ってくるも



のであって、それ自体確たる証拠があるわけではない。<sup>(86)</sup> 然し、次の点は考慮しなければならない。一九三五年夏のコミンテル第七回大会における人民戦線結成決議に至る迄の、三二年から三三年にかけて、コミンテルン執行委員会は、各国共産党指導者をモスコウに集めて秘密会議を開いた。この時の方針は既に人民戦線結成への方向転換を示すものであるが、アメリカの社会情勢は、議会における人民戦線勢力の結集の可能性を示していないとして、アメリカ共産党に大衆動員組織の拡大への努力を要請した。<sup>(87)</sup> そして更に、一九三四年にはアメリカ共産党文化人民委員のアレキサンダー・トラクテンバーグをモスクワに招請し、アメリカ共産党内に文化委員会を設け、文化団体、とりわけ、作家及び知識人の間における組織活動の促進をはかるよう要請した。<sup>(88)</sup> これらの文化団体は常に党の監視下に置かれていたことは言う迄もない。例えば、一九三二年の「フォスター及びフォードのための専門家委員会」が更に拡大されて、『文化と危機』と題するパンフレットを発行する迄には、先に発行された「公開書簡」に対する党本部の修正があったこと、<sup>(89)</sup> 又、一九三三年、ヒットラーが権力を掌握し、ファシズムの危機が叫ばれ、「ドイツにおけるファシズムの弾圧反対アメリカ委員会」が結成された時、その委員会を代表してマッシュュー・ジョセフソンが作成した声明文草案が、党本部の意向を充分伝えていないということまで没にされたこと、<sup>(90)</sup> これらが端的にそれを物語っている。又、知識人動員に対する戦術は活潑になったけれども、依然として党の知識人に対する疑惑は強く、勧誘はするが迎合はしないという態度は、ブローダーが従来の反知識人的急進主義の非を認め、「われわれは作家芸術家の関心をひくための特別の努力を払っている」としながらも、彼らに対して、「われわれの条件を満し」党の規律に従う様求めていること、<sup>(91)</sup> 更に、フォスターとドス・パソスの大統領選挙戦術をめぐる論争の中で、フォスターが、党の実権は、あくまで少数の同伴者作家にわたしたくない、<sup>(92)</sup>

と言っていることから明らかである。

この様な情勢の中で、一九三四年二月の社会党大会に対する共産党員の計画的襲撃事件は、左翼戦線における主導権争いの激しさを露呈し、これに反感を持った同伴者知識人の「公開抗議文」が発表されるや、署名者のうち、「同志」ジョン・ドス・パソスに対しては事実誤認を訴えて反省を求めておりながら、その他のエドマンド・ウィルソン、ライオネル・トリリング、ジョン・チェンバレン等を含む二十四名の知識人を反動的知識人として規定することによって、多くの同伴者を敵に回したことは、<sup>(93)</sup>ようやく軌道に乗りつつあった知識人動員の戦術にとつて、大きな痛手であった。しかも「極左主義」の傾向は『ニュー・マッセズ』の批評欄を担当する「左翼文学テロリスト」のグランヴィル・ヒックスにも強くみられ、彼の「マルクス主義批評」の立場は、アンドレ・マルロー、ジョン・ドス・パソス、ジェイムズ・T・ファレル、エドワード・ダールバーグといった著名作家を、ブルジョアの腐敗作家ときめつける極端なものであった。

同伴者知識人の戦線離脱という事の重大さに気がついた『ニュー・マッセズ』は、一九三四年七月、「マルクス主義批評に関するシンポジウム」を開き、ヒックスに批判的な作家をも含めて十四名からの解答、及びそれに対する編集部に、ヒックス、スタンレー・バーンショーの釈明を発表した。<sup>(94)</sup>

だが硬直したマルクス主義批評や極左主義に対する批判は既にラップ解散によって明確に示されていたし、アメリカ共産党内にも、この様な批判がなかったわけではない。アメリカ共産党の長老達、例えば、「インターナショナル出版社の社長であり、党人民委員の職にあり、『ニュー・マッセズ』とジョン・リード・クラブを掌握し……党中央委員会の一人であったアレキサンダー・トラクテンバーグ」<sup>(95)</sup>は、ジョン・リード・クラブを解散

し、より広い基盤に立った組織を創設することによって、宣伝価値の高いリベラルや同伴者知識人を吸収すべきであると考えていた。リベラルはほとんど出席しなかったが、反スターリニズム派の多くを含む全米ジョン・リード・クラブの代表者会議が開かれたのは一九三四年九月のことであるが、この時彼は、「ジョン・リード・クラブの目的は作家及び芸術家を革命の陣営に結集すること」<sup>(96)</sup>であり、「反帝国主義闘争における革命文学創造の重要性を強調し、文化運動におけるセクト主義を非難した」<sup>(97)</sup>。幹部会において、「人民戦線」の新しい方針に従ってジョン・リード・クラブを解散する、ということを彼から聞かされたとき、「新しい、若い作家育成を目的として出発したこのクラブ」が解散したら、これに期待していた若い作家達はどうなるのか、この方針は有名作家に対する迎合ではないか、と反論したソチード・ライトに同調者が無かつたことは、<sup>(98)</sup>党の方針の絶対性を示す証拠である。

この辺の事情についてレオン・デンネンは、若い作家を代表して次の様に語ったと言われている。「全米作家連盟結成の眞の決定は十三番街東五十番地の九階にあるアール・ブローダーの本部事務室で行われた。共産党文化人民委員のアレキサンダー・トラクテンバーグがわれわれ数名を一緒に呼んで、ジョン・リード・クラブは最早存在しない——従って、これは「アメリカ作家の広範な組織になる筈である」と話した。私は、会員に相談せずにこの組織を解散することは、非民主的である、と抗議した。彼の答えは、先ずわれわれがやるべきことは、党の決定を遂行することであり、民主主義を語るのはその次の問題である、ということであった。この抗議のために私は制裁を受けた。私は作家会議への呼びかけをした執行委員の一人であったけれど、私の名前はこの呼びかけに署名した十数名の中にはみえなかつた」<sup>(99)</sup>。又、マッシュュー・ジョセフソンはこの方針に賛成した者とし

て次の様に述べている。「人民戦線は善意ある人々にその立場を明確にさせた。われわれは作家として、われわれに降りかかって来ている危機を、兎に角言葉によって国民に自覚させ、われわれの政府に請願することが出来た（政治家や学者でこのことを一言でも発言した者は誰もいなかったのだ）。従って、多くの非共産主義者が全米作家会議の呼びかけに署名したからといって、別に驚くには当たらないことである」<sup>(100)</sup>。

この様にしてジョン・リード・クラブは解散し、第一回全米作家会議が一九三五年に開かれ、同時に全米作家連盟が結成されることになるのであるが、これについては機会を改めることにして、ここでは結びとして、第一回全米作家会議と第一回全米作家会議の類似点をあげておくことにする。

一九三四年の全米作家会議の目的は、要するに、(一)ソヴィエト大衆の目標とソヴィエト作家団体の目標の合一、(二)ソヴィエト文学の創造及びその組織に関する共産党の指導強化、(三)出身階級、国籍の如何にかかわらず、これらを結集した連盟組織の非セクト化と単一化であった。一方、全米作家会議の目的は、(一)一九二九年以降三十五年に至る全ての共産主義団体の大同団結、(二)非共産主義者の作家会議への結集、(三)新しいマルクス主義の採用とその具体化、であった。

然し、ジョン・リード・クラブの解散はもっと単純に、例えばマックス・イーストマンの言っている様に、ソヴィエト共産党の人民戦線の「トロヤの馬戦術」を遂行するに当って、過去のイメージを大衆に与える「ジョン・リード」という名前が障害になり、突然にその名称が廃止された<sup>(101)</sup>に過ぎないのかも知れない。

何れにしてもこの大会の議長をトラクテンバーグがつとめたことは、彼が「自選委員」であり、「当時のアメリカ共産党における文化人民委員」であり、「職権上の議長」<sup>(102)</sup>であるということと、先にふれた様に、この提

案が彼のソヴェエトからの帰国直後であることなどを考えれば、この二つの会議の指令がどこから出ていたものであるかは容易に推測出来るであろう。

三〇年代におけるアメリカ知識人の動向（樋口）

- (一) Daniel Aaron, *Writers on the Left* (Avon Library, 1969), p. 407.
  - (二) "Symposium: The First American Writers' Congress," *The American Scholar* (Summer, 1965), p. 505.
  - (三) Daniel Aaron, "More on the Thirties," *Miscellany* (Summer, 1965), p. 15.
  - (四) *The American Scholar*, *ibid.*, p. 515.
  - (五) Granville Hicks, "Communism and the American Intellectuals," *Whose Revolution* ed. by Irving DeWitt Talmadge (Howell, Soskin, Publishers, 1941), p. 79.
  - (六) *Prawda*, April 24, 1932 in *Soviet Literary Theories 1917—1934* by Herman Ermolaev (University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1963), p. 119. RAPP のこの著は、*文学者の組織* といふ。
- The management of the Association of Proletarian Writers (RAPP) announces that the association is liquidated and resolves to pass on to the Organizing Committee its journals, finances, and property. The literary circles in [business] enterprises are continuing their work.
- Secretariat of RAPP
- L. Averbakh, I. Makarov,  
A. Fadeyeva, V. Kirshon,  
F. Panforyov.
- Harrist Borland, *Soviet Literary Theory and Practice during the First Five-Year Plan 1928—1932* (King's Crown Press, 1950), p. 125 以下。
- (七) "RAPP" *Literaturnaya entsiklopedia* (Moscow, 1930, IV), p. 525.
  - (八) *Writers on the Left*, *ibid.*, p. 237.
  - (九) "The Charkov Conference of Revolutionary Writers," *New Masses* (以下 *NM* とする) (February, 1931), p. 7.

- (㉟) Franz Borkenau, *The Communist International* (W. W. Norton & Company, Inc., 1939), p. 230.
- (㊱) "The striking feature of our revolution is that it has established a dual power... Nobody hitherto thought, or could have thought, of a dual power. In What does this dual power consist? In the fact that side by side with the Provisional government, the government of the *bourgeoisie*, there has developed *another* government, weak and embryonic as yet, but undoubtedly an actually existing and, growing government..... the Soviet of Workers and Soldiers' Deputies." V. I. Lenin, *Selected Works* VI (International Publishers, 1935), p. 27.
- (㊲) Benjamin Gitlow, *The Whole of Their Lives* (C. Scribner's Sons, 1948), pp. 20—40. 論評。
- (㊳) Michael Gold, "Toward an American Revolutionary Culture," *NM* (July, 1931), pp. 12—13. 短評。この文章は、日本共産党の機関紙『世界』に収められて、Bela Illés, "Japanese Revolutionary Literature and the International Union of Revolutionary Writers," *NM* (August, 1931), p. 22 及び Kan Eguchi, "To American Writers and Artists," *NM* (July, 1931), p. 23 以下に引用されている。
- (㊴) *ibid.*
- (㊵) A. B. Magli, "Red Front, Comrade Renu," *NM* (November, 1930), p. 20; Michael Gold, "Notes From Kharkov," *NM* (March, 1931), p. 6; "Proceedings of the Kharkov Conference," (*Literature of the World Revolution*, 1931, Special No.); "The Kharkov Conference of Revolutionary Writers," *NM* (February, 1931), pp. 6—7. 論評。
- (㊶) RWF 水野俊一、因達、G. K. L. *NM*, April, 1933, p. 13. 論評。
- (㊷) Orrick Johns, "The John Reed Clubs Meet," *NM* (October, 1934) pp. 25—26. 中野実、トドロクニトテ、水野俊一、因達、G. K. L. *The Partisan Review* (New York), *The Avuil* (Missouri), *Leftward* (Boston), *Partisan* (Hollywood), *Cauldron* (Grand Rapids), *Left Front* (Chicago), *Left Review* (Philadelphia), *New Force* (Detroit), *The Hammer* (Hastford)
- (㊸) Granville Hicks, "Communism and the American Intellectuals," *op. cit.*, p. 79.
- (㊹) "It was decided that the magazine would not be one of communism or Moscow, but a magazine of American experiment. It would be for the working class, but not for any particular party speaking in the name of the working class."—Joseph Freeman, *An American New Testament* (Farrar & Rinehart, 1936), pp. 381—382. "On Being Radical," *NM* (May, 1927) 論評。

- (25) *NM* (January, 1930), p. 21. 訳 Fred R. Miller, "Will Proletarians Write?" *NM* (September, 1930), p. 22 及び Leon Dennen, "Soviet Literature," *NM* (November, 1931), p. 23 参照。
- (26) *NM* (April, 1930), p. 21 及び *NM* (February, 1930), p. 21 参照。 Joseph Kalar と Ralph Cheyney の題名は「ソビエト」。
- (27) Glad Struve, *Soviet Russian Literature 1917—1930*, (University of Oklahoma Press, 1951), p. 209
- (28) 巻頭「ソビエト文学の発展はソビエト文化に必然的である」との文。一七三七年以降のこと。
- (29) Alan Calmer, "Portrait of the Artist as a Proletarian," *Saturday Review of Literature*, (July 31, 1937), pp. 3—4. 原題は John Reed Club の水曜誌記者の「ソビエト作家」。
- (30) Richard Crossman ed., *The God That Failed* (Harper & Brothers, Publishers, 1949) pp. 115—117 参照。
- (31) Michael Gold, "Notes of the Month," *NM*, (September, 1930) p. 4 James T. Farrell は一七三五年の第一回合米作家集巻頭の「作家の種」の「誰が種を植えたのか」と題して「作家」の「種」を「ソビエト」の「種」の「種」であると説き及ぼす。
- (32) Herman Spector, "Review of A. Kreyrnberg, 'The Little World,'" *NM* (July, 1932)
- (33) Fred Ellis, Michael Gold, William Gropper, A. B. Magil, Harry Alan Potanikh, Joshua Kunitz と「ソビエト作家の種」の「種」の「種」を「ソビエト」の「種」の「種」であると説き及ぼす。
- (34) Gosephine Herbst と John Herrman は「ソビエト作家」の「種」を「ソビエト」の「種」の「種」であると説き及ぼす。
- (35) Michael Gold, "Notes from Khar'kov," op. cit., p. 5.
- (36) "The Charkov Conference of Revolutionary Writers," op. cit., p. 7.
- (37) Max Eastman, *Artists in Uniform, A Study of Literature and Bureaucratism* (Alfred A. Knopf, 1934) pp. 8—9 参照。
- (38) 巻頭の「Joshua Kunitz は「ソビエト作家の種」の「種」を「ソビエト」の「種」の「種」であると説き及ぼす。」
- (39) "A Statement," *NM* (February, 1931) p. 2, "To All Workers Group," *NM* (June, 1931) p. 23, "To Writers of All Countries," *NM* (November, 1931), p. 31, "A Call to Action," *NM* (December, 1931), p. 31, "To All Intellectuals"

- NM* (May, 1932) p. 3. "Draft Manifesto of John Reed Clubs," *NM* (June, 1932) pp. 3-4.
- (23) Edmund Wilson, *The Shores of Light* (Farrar and Strauss, 1952), p. 498.
- (23) Michael Gold, "Go Left Young Writers," *NW* (January, 1929).
- (25) Michael Gold, "American Jungle Notes," *NM* (December, 1929) 巻底.
- (26) "Whither the American Writers," *Modern Quarterly* (Summer, 1932) p. 11-19.
- (26) *Ibid.*, p. 11.
- (26) *Ibid.*, p. 12.
- (26) *Ibid.*, p. 19.
- (27) Granville Hicks, "Communism and the American Intellectuals," op. cit., p. 80.
- (27) Matthew Josephson, *Infidel in the Temple, A Memoir of the Nineteen-Thirties* (Alfred A. Knopf, 1967), p. xi.
- (28) "How I Came to Communism," *NM* (September, 1932) p. 7. 短評の跋論に於て Cifton B. Fadiman, Granville Hicks, Sherwood Anderson, Edmund Wilson, Michael Gold, Upton Sinclair 等が之を著す。
- (28) "A Statement," *NM* (February, 1931) p. 2.
- (28) "To All Workers Group," *NM* (June, 1931), p. 23.
- (29) 羅敏申の著す William Groper, Alexander Trachtenberg, R. B. Glassford, Michael Gold, K. Marmor, J. Sharer, A. B. Magli, Harry Allan Potamkin, T. H. Li. 編じた著書に於て Maxim Gorki, N. Krupskaya, William Z. Foster, Theodore Dreiser, John Dos Passos, Langston Hughes, Upton Sinclair, Ludwig Renn, Henri Barbusse, Lo Hsun, Tomas and Bela Ills 等編じた著書に於て Upton Sinclair, Ludwig Renn, Henri Barbusse, Michael Gold, "Toward An American Revolutionary Culture," op. cit., p. 13.
- (29) "Art is a Weapon, Program of the Workers Cultural Federation," *NM* (August, 1931) p. 12.
- (29) *Letters of Theodore Dreiser* II (University of Pennsylvania Press, 1959), p. 513. 短評 Dreiser 著に於て Earl Browder 編じた著書に於て Upton Sinclair が之を著す。
- (29) Sherwood Anderson, "Let's Have More Criminal Syndicalism," *NM* (February, 1932) pp. 3-4.
- (30) Edmund Wilson, "Kentucky Coal Town," *New Republic* (March 2, 1932) pp. 67-70 及び "Class War Exhibits," *NM* (April, 1932) p. 7 巻底。短評に於て Cifton B. Fadiman が之を著す。 Polly Boyden, Benjamin Leder, Dr. Elise



- Reed Mitchell, John Henry Hammond, Jr., Liston M. Oak, A. M. Max, Harold Hickerson などだ。
- (15) Dreiser を除いたこれらの作家・批評家は、非産物への直接的関係をもたず、十分な同伴者としての意識と行動に乏しいことが大半だ。例えは Dos Passos の様な極端な反共主義者となつて行く過程は、知識人の政治的にかかわり合つてを考へるべきで非常に興味のある問題であらう。
- (16) "Draft Manifesto of John Reed Clubs," op. cit., pp. 3—4. この書は露米同盟の題名である。 Joseph Freeman, Ian Wittenber, Maurice Sugar, Conrad Komorowski, Kenneth Rexroth, Charles Natterstand, Harry Carlisle, George Gay, Carl Carlson, Jack Walters, 及び露米同盟員として Maxin Gorky, Roman Roland, John Dos Passos, Seikichi Fujimori (Japan), Lu Hsin (Chen Shu-jên) (China), Johannes Becker (Germany), Paul Vaillant-Couturier (France) 及び Langston Hughes などがいる。
- (17) *Writers on the Left*, op. cit., p. 242 参照。
- (18) *ibid.*, p. 243.
- (19) *Infidel in the Temple*, op. cit., p. 124.
- (20) 恒久的な組織化をもちいたのではなく、種々のグループがその中心だ。 *Ibid.*, p. 152. 参照。
- (21) 日本への露米同盟の共闘の派手な "Culture and Crisis" というイベントは、その中心だ。
- (22) *Infidel in the Temple*, op. cit., p. 153.
- (23) *ibid.*
- (24) Dos Passos, *The Theme Is Freedom* (Dodd, Mead, 1956) p. 101.
- (25) Edmund Wilson, *The Shores of Ligh*, op. cit., p. 532.
- (26) "Communism and the American Intellectuals," op. cit., p. 82.
- (27) "Symposium: Thirty Years Later, Memories of the First American Writers' Congress," op. cit., p. 500.
- (28) A. Elstratova, "New Masses," *International Literature* (1932) pp. 107—104.
- (29) "Resolution on the Work of *New Masses* for 1931," *NM* (September, 1932), pp. 20—21.
- (30) Edmund Wilson, "Foster and Fish," (Charles Scribner's Son, 1931) pp. 11—27.
- (31) *The American Jitters*, op. cit., p. 22.

- (68) 何が異端であるかは規準が異なるわけではなから。例えば「異端行海」が著名な同業者知識人でありつておられたあのいわゆる場合「それと  
それと」の比較は比較的目安をなすのにはあつた。例えは一九三三年七月の American Spectator 紙上では Dreiser の反  
トキヤ斗争案に就いての批評に「たゞ New Masses の論議を引く事は、Dos Passos に就いての同様の  
な態である。
- (69) 弗拔 V. F. Calverton は *The Modern Quarterly* の編輯者であつた。この雜誌は前身 *The Revolutionary Quarterly* あり  
てこの書物に於いては、上層の層に於いては彼の政治的意見が反映して居る。この雑誌の編輯者には、この雑誌  
編輯の一部分の責任を負つた。David Ramsey and Alan Calmer, "The Marxism of V. F. Calverton", *NM* (December,  
1932), p. 9 參照。
- (70) "It is only in the case of Wm. Z. Foster that we find a man who combines an actual proletarian background  
with a contemporary activity in the labor movement. It is only the courageous intelligence of such men as Foster  
that keeps alive something of the proletarian fight and struggle which must eventually challenge our attention.  
(*Modern Quarterly*, Fall, 1928)
- (71) "Chose Your Uniform," op. cit., p. 15.
- (72) "Max Eastman's Hot Unnecessary Tears," op. cit., p. 15.
- (73) Michael Gold は "Proletarian Realism" なる用語を用ひて、既に述べたのである。これは書評である。その  
文は以下の通りである。 *NM* (September, 1930) pp. 4—5 參照。
- (74) この文は著者自身が用ひて居るものである。
- (75) Granville Hicks, "The Crisis in American Criticism," *NM* (February, 1933), pp. 3—5.
- (76) Edwin Seaver, "Sterile Writers and Proletarian Religions," *NM* (May, 1933), pp. 22—24.
- (77) Edwin Seaver, "The Authors and Politics," *NM* (June, 1933), p. 13.
- (78) *Pravda* (May 9, 1932) in *Soviet Literary Theory and Practice during First Five-Year Plan 1932—1933*, op. cit.,  
p. 123.
- (79) Louis Fischer, "A Revolution in Revolutionary History," *New York Herald Tribune* (November 27, 1932).
- (80) "RAP," *Literaturnyia entshlopedia*, op. cit., p. 525.
- (81) 中央委員会第四大会の報告。

Now that the rank and file of proletarian literature has had time to grow and establish itself, and that new writers and artists have come forward from factories, mills, and collective farms, the frame-work of the existing proletarian literary-artistic organizations (VOAPP, RAPP, RAPPW, etc.) is becoming too confined and impedes the serious development of artistic creation. There is thus the danger that these organizations might be turned from a means of intensive mobilization of Soviet writers and artists around the problems of socialist constructions into a means of cultivating hermetic groupings and of alienating considerable groups of writers and artists, sympathizing with the aims of socialist construction, from contemporary political problems. (Harriet Borland, p. 125)

(82) Joseph Pass, "In the Sunny South," *NM* (August, 1930), p. 23 参照。参照として Theodore Dreiser, John Dos Passos, Sherwood Anderson, Waldo Frank, Alfred Kreyenborg, Upton Sinclair, Louis Untermeyer, Carl Van Doren, Edmund Wilson などがある。この委員会は一九三一年には「政治的教養全国委員会」に発展した。

(83) 一九三一年の事件を論じた福地一九三五年の著書「米ソリョニヤ知識人の勢力は一九三四年後半にやがて増大した。

(84) "On the White Collar Front," *NM* (June 19, 1934), p. 4, Edwin Rolfe, "The Second Macaulay Strike," *NM* (October 23, 1934), pp. 20—21 参照。

(85) *Infidel in the Temple*, op. cit., p. 367, James T. Farrell など著 *Yet Other Waters* (1952) など。この著者の著書に「資本主義の没落を懸念する」の書がある。

(86) 原は Scottsboro 事件に関する T. Gusev の著書「The End of Capitalist Stabilization and the Basic Tasks of the British and American Sections of the Communist International」(*Communist International*, October 15, 1932) に Earl Browder の "Letter to the editor," *New York Times*, September 29, 1950) などがある。この著者は「米ソリョニヤ知識人の」の著者である。

(87) *US*, 75 : 3 HSPCIA, H (August 12—23, 1938), p. 883, testimony of J. B. Matthews 参照。

(88) *US*, 80 : 1 HCUA, H (October 20—30, 1947), pp. 173—176, testimony of Howard Rushmore. 参照。

(89) *Infidel in the Temple*, op. cit., pp. 151—152.

(90) *ibid.*, p. 161. 参照。

(91) *ibid.*, p. 132.

(92) *ibid.*, p. 126.

(87) "To John Dos Passos," *NM* (March 6, 1934), pp. 8—9. 註 "An Open Letter to the Communist Party" 〇聯共黨誌  
111頁註499。

(88) *NM*, Book Supplement, (July 3, 1934) pp. 27—32.

(89) Whittaker chamber, *Witness* (Random House, 1952), p. 264.

(90) "National John Reed Club Conference," *Partisan Review* (November-December, 1934), p. 61.

(91) Orrick Johnsons, "The John Reed Clubs Meet," *NM*, (October 30, 1934) p. 25.

(92) *The God That Failed* op. cit., p. 136.

(93) Max Eastman, *Heroes I Have Known* (Simon and Schuster, 1942), p. 203. 1) 〇註の 4 点 〇 州 大 聯 共 黨 誌 第 4 卷 〇 附 録 〇 4 号。  
Theodore Dreiser, Waldo Frank, Josephine Herbst, Michael Gold, Joseph Freeman, Robert Cantwell, Erskine  
Caldwell, Malcolm Cowley, Horace Gregory 註499。

(94) *Infidel in the Temple*, op. cit., p. 365.

(95) *Heroes I Have Known*, op. cit., p. 203.

(96) "Symposium: Thirty Years Later," op. cit., p. 500.